善悪が揺らぐ小説

ヴェラ・ブリテンの『名誉階級』にみるフェミニズムの表出

甲斐　絵理

はじめに

本発表は、20 世紀の英国の作家ヴェラ・ブリテン(Vera Brittain)の長編小説『名誉階級』(*Honourable Estate*, 1936)を取り上げ、小説という文学形式の中で、いかに彼女のフェミニズムが表出されたかについて論じる。

ブリテンは、女性の視点で第一次世界大戦を描いた自伝『青春の遺言書』(*Testament of Youth*, 1933)で知られる作家であるが、同時に、女性たちの苦境について多数の記事を執筆したフェミニストでもあった。しかし、ブリテンの作家作品研究を行ったブリッタ・ザンゲン(Britta Zangen)は、彼女が寄稿した記事を調査した際、彼女の 1920 年代のフェミニズムの鍵は女性たちが「自己決定」(self-determination) することであるとみなしたが、これを小説の分析に応用した際、その理想を体現する人物が登場しないという事実に直面する(74)。ブリテンがこの小説で描き出したのは、むしろ二世代に渡ってヴィクトリア朝の残滓を引きずり、キリスト教のジェンダー規範とフェミニズム思想を持つ自己との間で苦悩する女性たちであった。このように作家がジャーナリズムにおいて表明した思想は小説という形式で表されるものと常に同じではない。したがって、本発表ではそのずれや葛藤に着目し、小説の形式で示されたブリテンの世代を越えるフェミニズムのあり方について論じる。

女性と共同体

この小説は、1894 年に英国国教会の教区司祭トーマス・ラザストーン(Thomas Ratherston)が 17 歳年下の妻ジャネット(Janet)の罪深い行いについて地方の教会で祈る場面から始まる。彼は日頃から妻の日記を勝手に読み、ある日「妊娠を壊す」(destroy pregnancy, 74)という書き込みを見つける。その夜、彼は妻に‘It’s a married woman’s first duty to God and her husband to bear him children’ (76)と説いて、彼女のベッドに近づいていく。

この「妊娠を壊す」行為は本小説の第一の主人公ジャネットにとって夫の信じるキリスト教のジェンダー規範への抵抗であり彼女のフェミニズム思想の表明であった。なぜなら彼女はもともと母性や子どもの出産と育児、夫に献身といった当時の既婚女性の義務に否定的である一方、政治への関心が高い女性であった。故に、結婚後も教区の政治団体の活動に没頭していたが、あるとき帰宅したところ息子デニス(Denis)が病気になっていたことを夫に責められて辞職した(38-52)。この出来事が子どもの存在が自身の「行動的な人生」(my active life)の妨げとなるという考えへと繋がり、第二子を妊娠したとき彼女は身体を用いた「反逆をする」(rebel)(74)。

しかしジャネットの思想や主義を表す行為は周囲の人々によって彼女の性格の問題としてみなされる。実際、この反逆も夫によって望まない妊娠のきっかけへと変えられ、その結果ジャネットは翌年に流産した。その流産さえも母性の否定した罪だと説教をしに来た別の教区司祭に、彼女は‘I know you and my husband both think me a wicked woman’と自虐的に答える(80)。その後も彼女は自分で政治団体を立ち上げるが、またも夫の不祥事で妨げられたため、次の教区であるウィットナル(Witnall)村へ移動する際に離婚を決意し、その意思表示として家事や育児そして夫の世話を放棄する(94)。だがそれも息子デニスがガーデンパーティにそぐわない服装で現れたのを見たこの村の女性によって母親であるジャネットの怠慢だとみなされ(232)、やはり個人の性格の問題として読み替えられるのである。

この村の女性とは第二の主人公ルース(Ruth)の母ジェシー(Jessie)である。彼女は村の近くで数世代にわたって陶器会社を営む名家アリェンデール(Alleyndene)家でガヴァネスをしていたことをきっかけにこの家の長男と結婚した。だが彼女は母から性の知識を教えられることなく性体験を迎えたことで、性的な事柄を嫌悪し、その感情を娘ルースに性教育として伝える。しかし、‘[H]ow careful of herself a girl has to be. When men do wicked things like this, it’s always the woman who pays the price’と言う母に、ルースは‘But why should she?’と質問する(255)。それにジェシーが‘[I]t’s the law of Nature’と答えると、ルースはこれを否定して‘But why don’t women stand up for themselves?’と問い、ジェシーがサフラジェットについて言及したことで、ルースは感銘を受けて大きくなったらサフラジェットになると宣言する(256)。だがこの明らかな思想の表明にもかかわらず、後日ルースが「マタイによる福音書」第 23 章の一部を用いて演説の練習をしているところを見つけたジェシーは地元の医者を呼んで、この行為もルースの繊細な性格に起因した奇行と診断される(266)。

このように本小説には女性の日常に隠れたキリスト教のジェンダー規範と女性たちの対立が描かれている。しかし、その抵抗は所属する共同体の人々によって女性自身の性格の問題にすり替えられるのである。

思想とコミュニティ

英国の知識人レイモンド・ウィリアムズ(Raymond Williams)は著書『田舎と都会』(*The Country and the City*, 1973)の第 16 章「わかる社会」（Knowable communities）で、英国の女性作家二人の作品を論じながら、小説の中の田舎の共同体から「疎隔された個人」とその彼らが作り出す「道徳史」の関係を次のように述べている。

> It is part of a crucial history in the development of the novel, in which the knowable community . . . comes to be known primarily as a problem of ambivalent relationship: of how the separated individual, with a divided consciousness of belonging and not belonging, makes his [or her] own moral history. (Williams 174)

この小説においてジャネットとルースは新しい道徳をロンドンという都会で形成する。この田舎と都会について、ブリテンは序文の冒頭で本書と自己との間に距離を置く一方、作中で描かれる「地域」(region)については馴染みのある例外であると認めている(1)。この都会において、ジャネットとルースの思想の表明は他者に受け入れられる。例えばジャネットがロンドンの教区に移動したあとに起こした教会への放火未遂事件(155-165)は、彼女に夢遊病のような症状があったにもかかわらず、家を出て自由を手にする契機となる。これはジャネットが田舎から都会へという地理的移動を経たことで、自身の思想に即した政治コミュニティである女性社会政治連合(WSPU)に参加し、夫や息子が彼女の思想を可視化できるようになっていたことが一助となった。その後、ジャネットは新しい道徳として「マタイによる福音書」の第 10 章 34 節 *I came not to send peace, but a sword* を含む数節を繰り返し呟くようになり、残りの時間を女性の自由を獲得する運動を続けるために使うと決意する(126)。このとき彼女は自身の死を超えた先の次世代の人々をもその射程に入れる。

その次世代であるルースも第一次世界大戦で恋人を失い、英雄の子どもを産むという当時流布した理想を果たせなかったという失意から戦後モスクワで看護活動をしていたが、ジャネットの息子デニスと再会したことで、ロンドンに戻って自身の思想と一致する政治コミュニティである労働党事務局で活躍の場を得る(312-444)。そしてルースは、労働党の候補者として都会から田舎へとジャネットとは反対の流れを辿り生まれ育ったウィットナル村に帰郷し、女性と結婚に関する演説をして女性有権者に呼びかけたことで、長年自由党を支持する自身の家と経営する会社で働く労働者との間に政治的な革命を引き起こし、1929 年に初当選する(507-558)。その後、新人議員になったルースは夫デニスからジャネットの日記や手紙を受け取って読み始める(577)。

このように、本小説で疎隔された女性の思想は、同じ思想を掲げる団体に所属することで公のものになる。ブリテンは、それを二つの世代の女性主人公を田舎と都会の間を移動させることによって、田舎の共同体にて遵守される道徳や価値観が都会のコミュニティで生まれる新しい思想によって撹乱され変化するという円環の中に描いた。そのため本小説の副題は「移り変わりの小説」(*A Nobel of Transition*)と名付けられたと考える。

結び

ブリテンにとって「自己決定」は彼女のフェミニズムの鍵である。しかし実際に当時の女性たちが自己決定した人生を歩もうとしても、それに基づく行為は周りの人々によって女性の性格の問題にすり替えられていた。それは本小説の冒頭の引用で示唆されるように、当時の女性たちは男性たちと違い「正しいことと正しいこと」(right and right, 7)との間で苦悩する悲劇の中を生きていたことに要因がある。この定まらない女性の善悪の揺らぎを、ブリテンはキリスト教のジェンダー規範とフェミニズム思想の間で苦悩する女性たちを二世代も描くことで小説の中に再現した。その上で、この二世代の女性たちが田舎の共同体と都会のコミュニティの間を移動することで生じる思想による撹乱と道徳の変化を円環させて描くことで、読者に世代を越えるフェミニズムのあり方と重要性を提示した。

引用文献

Brittain, Vera. *Honourable Estate: A Novel of Transition*. Virago, 2000.
——. *Testament of Youth: An Autobiographical Study of the Years 1900-1925*. Penguin Books, 2005.
Williams, Raymond. *The Country and the City*. Oxford UP, 1975.
Zangen, Britta. *A Life of Her Own: Feminism in Vera Brittain's Theory, Fiction, and Biography*. Peter Lang, 1996.
スペンダー, D.『フェミニスト群像』. 原恵理子他訳, 勁草書房, 1987 年.

註 *Honourable Estate* の日本語訳『名誉階級』はブリテンを日本に紹介した最も初期の研究書『フェミニズム群像』の勝方恵子訳を参照した。